学力向上対策室だより

～「なんで〇〇なの」～

R8
6月

「なんで〇〇なの」この言葉を、子どもとおとなの2つの立場で想像してみてください。

子どもの「なんで〇〇なの？」

子どもの立場の場合、「なんで〇〇なの？」と後ろにクエスチョンマークがつきますよね。特に、3歳から6歳ごろによく現れるこの言葉。これは、認知発達の面で、

- ●語彙が急速に増える
- ●「原因と結果」を理解し始める
- ●自分と他人の考えの違いに気づく
- ●世界の仕組みを知りたいという知的好奇心が高まる

ために、「なんで？」が爆発的に増えるそうです。

つまり、子どもの「なんで？」は、

- ★探求心
- ★批判的思考の芽生え
- ★科学的なものの見方の基礎
- ★学習意欲の源泉

なんですね。

では、ここで、子どもの「なんで〇〇なの？」に対しての、おとなの返答について考えてみましょう。「知らん！」と、一言で片づけてしまわないでください。

「なんでなんでって、うるさいな。自分で調べなさい！」
「知らんよ！なんでも『なんで？』って言わんといて！」

「なんでなんやろなぁ。お父さんと一緒に考えてみよう！」
「面白いところに気づいたなぁ。お母さん考えたことなかったわ。
なんでかわかったら教えてね！」

このように、子どもの「なんで？」を、子どもにとってもおとなにとってもポジティブに捉え、子どもの脳を育てるチャンスにしていきましょう。

これは、就学前の子どもだけに当てはまることではありません。小中学生の子どもが「なんで〇〇なんやろ…」とつぶやいていた時には、ぜひ上に示した〇のかかわり方をしてみてください。きっと頭も心も満たされていくと思いますよ。

おとなの「なんで〇〇なの！」

では次に、おとなの立場の場合を想像しましょう。

「なんで〇〇なの！」と後ろにびっくりマーク（エクスクラメーションマーク）がつきませんか。もしくは、「なんで〇〇なの…」でしょうか。

「なんで〇〇なの！」この場合、声のトーンはどうですか。かなりきついトーンではないでしょうか。

「なんで〇〇なの…」この場合だと、かなり低い声のトーンではないですか？

いずれの場合も、おとなが「なんで〇〇なの」と使う場合、それはいい場面ではないことが想像できますね。

例えば、子どもがテストや宿題の回答を間違えたとき、「なんで間違えたの」というおとなの言葉は、子どもにどのように響くのでしょうか。

おとなは責めているつもりはなく、ただただ理由を知りたいだけかもしれません。

自分がなぜ回答を間違えたのかを分かっている子（答えられる子）もいるかもしれませんが、そう多くはないでしょう。むしろ、多くの子どもにとっては、自分を否定され、責められているように聞こえているのではないでしょうか。

少し変えるだけで

回答を間違えたときの「なんで間違えたの」を、「どこで間違えたの」に変えてみてください。これだけで、後ろの「！」や「…」が「？」に変わりませんか。そして、声のトーンも柔らかくなったのではないでしょうか。

さらに、「どこで間違えたの？」の後ろに言葉が続きそうですね。勘のいい方は気づいたのではないでしょうか。そうです、左ページの〇の声かけと同じように、

「どこで間違えたの？一緒に考えてみよう！」
「どこで間違えたの？わかったら教えてね！」

ですね。

自分の間違いや失敗をすぐに振り返り、言語化できる子はそうそういません。多くの子は、間違いや失敗を突っ込まれると、黙ったり、言い訳をしたりしがちです。しかし、おとなは「なんで」で問いがちです。

なにしてこぼれたん？

私の子どもは食事中によく飲み物の入ったコップを倒し、飲み物を机や床にぶちまけます。「なにしてんねん！」「なんでこぼすねん！」と、思わず言ってしまいそうになりますが、「なにしてこぼれたん？」と聞くようにしています。机や床が濡れることは、そう大きなダメージではありません。子どもの心に大きなダメージを与えないように。

泉南市教育委員会　教育部　学力向上対策室
〒590-0505 大阪府泉南市信達大苗代 374-4
TEL：072（483）3673

花笑み sennan